

通訳教育における訳出プロセス分析 Mental Processes Analysis in Interpreter Education

南 津 佳 広

1. はじめに

日本において会議通訳者という職業があらわれはじめたのは、戦後復興から高度経済成長期にかけて開催された東京オリンピックや大阪万国博覧会の頃までさかのぼる。とくに同時通訳は、1969年にアポロ11号が月面に着陸した様子を衛星中継で流した際に、一躍脚光を浴びた。それからというもの、国内で通訳需要が高まるに連れて、通訳者に求められる知識と技量のレベルも一段と高まりを見せた。そして現在では、通訳の種類も専門に特化して多岐にわたっている。主なものとして、会議通訳・放送通訳・社内通訳・医療通訳・司法通訳・コミュニティー通訳などがあげられる。

ところで、日本における会議通訳者の養成は、民間の通訳者養成機関が長年にわたって牽引してきた。この民間の養成機関を経た通訳者たちが、大学で外国語教育科目のひとつとして開講されている通訳関連科目を担当している。そして、大学で開講されている通訳関連科目では、その指導法が議論的となっている。多文化社会が進むなか、高度な外国語運用力に裏付けされた異文化コミュニケーション能力を習得させるには、どのような教育法があるのか。本稿ではその基盤をなすであろう通訳プロセスの分析を提案する。

まず、2節ではヨーロッパからはじまった会議通訳の歴史を振り返り、ヨーロッパと日本における通訳教育の違いを比較する。3節では、日本の大学における通訳教育を行う意義を検討し、通訳プロセスを分析する重要性を述べる。4節では実際の英日同時通訳データを参照して、名詞句とその訳出プロセスを分析し、その枠組みを示す。

2. 通訳教育の系譜

この節では、通訳教育の成り立ちを概観する。ヨーロッパと日本での通訳教育の違いを簡潔に比較することからはじめる。そして、現在の日本の大学における通訳教育を位置づける。

2.1. ヨーロッパにおける通訳教育

ここでは、ヨーロッパで始まった会議通訳の歴史を振り返り、ヨーロッパにおける会議通訳者を養成するための通訳教育について簡潔にまとめる。そして当初のヨーロッパにおける通訳教育は、各国の政府主導によるもので、職業訓練の要素が強かったことを述べる。

近代の会議通訳の始まりは、第一次世界大戦後のパリ講和会議にて行われた英語・フランス語の逐次通訳といわれている (Herbert 1978)。これを契機に、西ヨーロッパを中心に逐次通訳を行う会議通訳を職業とする人たちが現れ始めた。そして、同時通訳が試験的に採用されたのが、1928年に行われた国際労働機関での総会と第6回コミンテルン大会であった (Goffman 1963)。その後、試行錯誤を経て同時通訳ブースとスピーカーの発言と通訳した音声を伝える電話回線が開発され、ニュールンベルグ裁判を迎える。この裁判では、通訳にかかる時間を大幅に短縮するため、本格的に同時通訳ブースと電話回線を整備した同時通訳装置が設置され、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語の同時通訳を介して裁判が行われた。ニュールンベルグ裁判において同時通訳が成功したことを受け、1951年に設立された国際連合でも、同時通訳方式を採用することになった。このことは、国際連合が付設する国際機関でも同時通訳を採用することを促し、それに向けて同時・逐次通訳の技術を備えた会議通訳者の養成が本格的に始まっていった。では、ヨーロッパではどのようにして会議通訳者の養成を行っていったのであろうか。

ヨーロッパにおける会議通訳者の養成は、1940年代から60年代初頭にか

けて興隆を見せる。ここで、代表的な養成機関の成り立ちを追ってみよう。1941年にスイスのジュネーブ大学にて会議通訳者養成コース（ETI）が設置され、オーストリアのウィーン大学で養成が始まったのは1943年のことであった。つづく1946年にアメリカのワシントンにあるジョージタウン大学に通訳コースが設立され、ドイツのハイデルベルグ大学（IDU）には1950年に、そして、フランスのパリ第三大学の通訳翻訳高等学院（ESIT）が創立されたのは1958年のことであった。それから4年後の1962年、旧ソ連のモーリス・トーレーズ記念外国語大学に通訳・翻訳コース（UNLTC）が設置された。

これらは、そもそもビジネス・軍事目的で設立された通訳者養成の組織であったが、会議通訳者の需要が高まるにつれ大学組織へと移管されていったという。そこで大きな役割を果たしたのが、1953年に創設された国際会議通訳者協会（AIIC）である。AIICそのものは、実践の会議通訳者が集まって創設した職業団体であるが、通訳教育にも強い影響を及ぼした。AIICが1959年に採択した“school policy”はその後のヨーロッパにおける高等教育機関での通訳者養成の基準となり、1960年に結成された翻訳者・通訳者養成のための大学機関協議会（CIUTI）へとつながる。このCIUTIの加盟校では、学部・大学院とは切り離された組織で、即戦力となる会議通訳者を養成するために、いわゆる適正生存の原理則った見習い型の職業訓練教育が行われていたのだ（Herbert 1978、Mackintosh 1999、Goffman 1969、Seleskovitch 1999、Chernov 1999 etc）。

1970年代に入ると、他の学術分野の研究者が通訳行為に関心を抱きはじめる。当初は言語心理学や記憶研究など他分野の研究者が同時通訳の同時性に目を向け、そのプロセスを探ろうとした。それに対し、現役通訳者たちも言語学や心理学などその他の研究分野の成果を援用して、安定した通訳を可能にするメカニズムを探ろうとした。これらの研究成果は1980年以降、通訳教育の中に徐々に組み入れられるようになった。そして、通訳研究をひと

つの学術領域として位置づけつつ、即戦力となる会議通訳者を育成するため体系化された高等教育システムを作ろうとしているのである。

2.2. 日本における通訳教育

この節では、日本における通訳者養成に関してまとめる。日本人の同時通訳者の登場は、1950年のスイスのコーにて開催された道徳再武装運動(MRA)の会議における英語の同時通訳であった。ただし、これは試験的なものであり、本格的な英語の会議通訳者登場は戦後復興と高度経済成長を背景にしたビジネス界に支えられていた。日本生産性本部から派遣され米国国務省で訓練を受けた通訳者たちのほか、財界人が東京オリンピック・大阪万国博覧会などのために民間の会議運営会社を次々に設立した。たとえば、1965年設立のISSやサイマル・インターナショナル、1966年設立のインターグループなどである。この民間の会議運営会社がのちに通訳者養成機関を設置し、長年にわたって日本の主に英語の会議通訳者の養成を牽引してきた¹。

その後、通訳関連科目を開講する大学が日本でもあらわれはじめた。現在では、その数があまりにも多いため、具体的な数字を把握するのは難しいものの、興味深いのはその教員の多くが、民間の会議通訳養成機関を経た通訳者であるところだ。したがって、その授業内容も、かつて教員自身が経験した民間通訳養成機関での指導法に負うところが大きい。では、民間の通訳者養成機関ではどのような指導が展開されているのだろうか。

民間の通訳者養成機関では、ヨーロッパにおける初期の通訳教育システムと同様に、通訳という特殊技能を持った専門家を養成するための職業訓練として教育を行っている。そこでは、一般的に入学のための選抜テストを行い、一定以上の語学力と知識を持った受講生に対して、適正生存の原理にもとづいて集中的に技能訓練を施している。そして、最終的に生き残った(勝ち残った)ものだけがプロへの道に進むことができる仕組みをとっている(稲生・染谷 2005)。その訓練方法は、具体的には、以下のようなプロセスが一

一般的に認められる。

- (a) 講師が教材テープを流す。
- (b) 講師が、受講生にその部分を通訳に流すように求める。
- (c) 講師が受講生の訳を評価する、もしくは講師がモデル訳を提示する。

基本的にこの3つのステップを基本的に繰り返して、実践的な通訳訓練を行っている。日本の大学で開講されている通訳関連科目も、たいていこのアプローチに似通った方法を採用しているといっても構わない。

ところが、民間の通訳者養成機関における通訳科目と、大学が提供する通訳教育とでは、開講する環境に大きな隔たりがあり、同じようなアプローチをとることがはたして有益なのか大いに疑問が残る。では、民間の養成機関と大学における通訳者教育をめぐる環境では、具体的にどのような点で異なるのだろうか。

2. 3. 民間の通訳者養成機関と大学における通訳教育の違い

民間の通訳者養成機関と大学での通訳教育をめぐる環境にはどのような違いがあるのだろうか。まず、受講生から見ていきたい。民間の養成機関に集まる受講生のほとんどは、短大・大学を卒業後、社会に出て仕事を抱えながら、将来プロの会議通訳者を目指して勉強をする人たちである。そのため、彼らのやる気と目的意識は非常に高い。

それに対して、大学の通訳関連科目を受講する学生は、将来プロになろうと明確に目標を定めている者はほとんどいない。学生に受講動機を尋ねたところ、「英語が好きだから / 面白そうだから / 音楽番組で海外のアーティストの通訳をしているのを見て何となく通訳に興味がある」という意見が大半を占めていた。

受講生の語学力を比較してみよう。民間の通訳者養成機関では共通して通訳の技能訓練を開始するレベルを最低でも TOEIC で 900 点前後と設定し、語学力では一定の質を確保しているのに対し、大学の通訳関連科目ではそう

はいかない。このように語学力の水準が低い学生に対して、民間の通訳者養成機関と同じように職業訓練としての通訳技能訓練を行ったとしても、結果的に受講生の自信を失わせ、学習意欲を削いでしまうことになる。

指導の流れはどうか。民間の通訳者養成機関での授業は、受講生に教材テープの通訳をさせてから、講師がコメントを加える形式の授業が一般的である。個々の受講生の訳は、それぞれの理解度や通訳技能の習熟度が直接反映されている。それに対して、講師は現場で培った独自の訳出スタイルを持っており、そのスタイルに基づいて、現場に即した指導を行おうとする。そのため、コメント内容はどうしても実戦に即した場当たりのものになってしまう。たしかに、いわゆる適正生存の原理に則るならば、このような指導法は有効かも知れない。なぜなら、講師は自分自身の現場での通訳経験や訳出のスタイルに基づいてコメントすればよく、受講生は講師によって異なるコメントに対し、自分自身にとって意味のあるものだけを消化し、自分なりに体系化して通訳の能力を身につければ良いからである。

ところが、大学で同じような授業を展開するわけにはいかない。なぜなら、講師が「何を教えるか」という明確な指針がないまま、豊富な現場経験にもとづいて場当たりにコメントをしたとしても、講義全体の統一性や体系性を欠くことになってしまうからである。さらに、講師のコメントを消化・体系化する能力をまだ持ち合わせていない受講生にとっては、結果的に「通訳は自分には向いていない」や「英語を使う仕事に就くことに対して自信をなくした」、「英語そのものが嫌になった」といった否定的な反応を引き起こす可能性が高い。では、大学において通訳教育を行う意義はどこにあるのだろうか。

3. 日本の大学で通訳教育を行う意義

この節では、日本の大学において通訳関連科目を設置する意義を検討する。そして、その意義は、学生が今後ますます進展する多文化社会に積極的

に貢献できるようにするため、基礎的な異文化コミュニケーション能力を習得させることにあると述べる。

現在、日本の大学では、学生の外国語学習経験を深め、視野を広げるべく幅広い語学関連科目が設置されている。また、これらの科目を担当する教員にも多様性が見られ、学生がキャリアパスを考えるに当たって、ロールモデルとなるように配置されているところもある。大学における通訳関連科目も、そのひとつに位置づけられている。これまで日本の大学で開講されてきている通訳関連科目を見てみると、大きく分けて、①高度な語学運用力を持ち、将来通訳者を目指す学生に対して行う通訳訓練、②言語面に比重を置き、通訳技能訓練手法を応用した外国語教育、③通訳訓練を通して言語経験を深めつつ、異文化コミュニケーション能力を伸ばす教育の3つに分類できる（鍋倉 1986、西村 1995、鳥飼 1997、小沢 1998、新崎 2005、染谷（他）2005、田中（他）2007）。①は主に高度職業人養成の一環として、大学院の修士（博士前期）課程や学部3・4年と大学院を結びつけた特化コースなどで開講されている。②は従来から外国語教育の変種として、文学部・外国語学部・国際関係学部などで数多く開講されてきている。③は単なる語学の知識だけではなく、その運用力も含めたコミュニケーション能力を育成する必要性が高まってきたこともあり、コミュニケーション関連科目のひとつとして位置づけられ開講されている。

では、これらの通訳関連科目は学生の外国語学習経験に対しどのような役割を果たしうるのか。ひとつの可能性として考えられるのは、今後ますます進展するとされている多文化社会に対して、積極的に貢献できる人材育成への足がかりとすることである。なぜなら、通訳者は単に2カ国語以上のことを操るだけではなく、異文化を伝える担い手としての役割も担っているからである。この異文化の橋渡し役としての通訳者に求められる能力として、稲生・染谷（2005）は以下の6つの能力をあげる。

- (a) 2つの言語の文法・言語運用能力

- (b) 2つの言語の背景にある文化、非言語的要素を含む語用論的能力
- (c) 2つの言語の談話レベルでの処理能力
- (d) 通訳者としての方略能力
- (e) 情報ギャップを埋めるために必要な情報収集・調査能力
- (f) 各専門領域に関わる背景知識

通訳者に求められるこれらの能力を前提にするなら、今後の通訳関連科目のあり方としては、単に語学力を鍛えるだけではなく、文化・状況に見合った適切な方法で行動でき、多文化を仲介する基礎能力を習得できるようなものを目指すべきであろう。

そこで、本稿で提案したいのが、異文化コミュニケーション能力を習得することを目指した通訳教育の根幹をなす通訳プロセスの分析である。逐次・同時通訳の実践演習を行ったあとに行われる教員による評価は、外国語学習と異文化コミュニケーション能力の育成の本質にかかわる重要なものである。なぜなら、先述したように、個々の学生の訳はそれぞれの理解度や通訳技能の習熟度が直接反映されているからである。そこで、受講生が教員による評価を手がかりにして、2つの言語間の表面構造の違いや、その背景にある文化的な要因をさぐり、聞き手にとってわかりやすく、誤解のないように伝えるにはどのように工夫したらいいのか分析することが、言語経験を深め、異文化を体験することにつながるからである。そこで、原発言と学生が行った訳を照らし合わせて、双方の表面構造から掘り下げて分析を行う通訳プロセスの分析はまさに根幹をなしているといえよう。次節では、その通訳プロセスの分析を具体的に見ていく。

4. 通訳のプロセス分析

この節では、上述した通訳プロセスを具体的に検証する。通訳者が起点言語（SL）を手がかりに、どのようにして目標言語（TL）で訳出しているのか、両言語の構造的も考慮に入れながら分析をすすめる。

4. 1. 名詞句を手がかりに

通訳のプロセスを観察するにあたって、通訳行為とその特徴をもう一度踏まえておく。通訳は、スピーカー（原発言者）の発言の内容を、訳出する環境に見合うように TL で再表現することにある（Johns 1998、Seleskovitch & Lederer 1995、Setton 1999）。ただし、それは言語間の表面的な置き換え“trans-code”だけではなく、原発言者の伝達意図を目標言語で再表現する“re-verbalization”という作業が含まれている（Seleskovitch & Lederer 1995、Seleskovitch 1999）。その間、通訳者は原発言や自分自身の訳出のモニタリングを行い、たまに修正しながら、センテンスより小さな分節単位、つまり、通訳者が「訳出できる」と判断した単位で漸増的に処理を進める（Gerver 1976、Setton1999）。

そこでこの節では、英日の「生の」ⁱⁱ同時通訳データにあらわれた SL の名詞句“NP₁ of NP₂”とその訳出を手がかりに、リアルタイムでの訳出のプロセスを分析する。

同時通訳データを観察していると、“NP₁ of NP₂”の訳出をめぐる面白い現象が認められる。まず、統語的側面を考えると、英語では修飾部の「NP₂」が右方枝分かれ（right branch）となるのに対し、日本語では左方枝分かれ（left branch）となる。すると、英語の“NP₁ of NP₂”に対応する日本語としては、「NP₂の NP₁」がまず思い浮かぶであろう。ところが実際の同時通訳データを観察すると、それ以外のパターンで訳出をしていることがわかる。（1）を見ていただきたい。これは、原発言と通訳を発話のタイミングに合わせ、シンクロ表記したデータである。

(1)

E 096	[B]: NOW, THERE ARE SOME PROBLEMS WITH THIS CLAIM... IF YOU SAY THE HEART AND SOUL OF
J 096	[J]: でもこの主張には、ちょっと問題があります。…
E 097	AMERICA IS FOUND IN HOLLYWOOD, I'M AFRAID YOU ARE NOT <u>THE CANDIDATE OF CONSERVATIVE</u>
J 097	アメリカの精神と 魂がハリウッドにあるというのであれば、これは
E 098	<u>VALUES</u> (APPLAUSE)
J 098	保守的な価値観を代弁する候補であるとはいえません。

[#5]

ここでは、E 097 ～ 098 行目の“the candidate of conservative values”に対し、通訳者は J 098 行目で「保守的な価値観を代弁する候補」と訳出している。この“the candidate of conservative values”を「保守的な価値観の候補」ではなく「保守的な価値観を代弁する候補」と訳出したのには、何に動機付けられているのだろうか。以下では、その要因を分析していく。

4.2. 訳出パタンの出現頻度

先述したとおり、同時通訳者はセンテンスよりも小さな、「訳出できる」と判断した単位ですぐに訳出をしなければならず、聞き取る段階で不明な箇所があっても原発言者に聞き返すこともままならない。したがって、原発言者の発話意図を常に十分把握した上で訳出しているとは必ずしも言い切れない。

そのため、同時通訳者が SL 表現の語彙項目に含まれる言語的意味、つまり、辞書的意味を反映させて訳出するのではないかと考えられる。たしかに、このようにして選ばれたものは訳語候補を呼び出す労力の点でも負担が少ない。そこで、南津・西村（2005）ではスクリプト化した同時通訳データをもとに、“NP₁ of NP₂”の訳出の傾向を測定したⁱⁱⁱ。手順としてはまず、サンプルの同時通訳資料 [#1] ～ [#5] から、“NP₁ of NP₂”に対応する訳出表現 273 例を抽出し、その訳出パターンと出現頻度を調べた^{iv}。結果は表 1 のとおりである。

訳出パターン	%
(a) 「統語的対応型」	39.8%
(b) 「意味論的固定型」	32.1%
(c) 「語用論的調整型」	28.1%
計	100

表1 訳出パタンの結果

その結果、訳出傾向は以下の3パターンに大別された。ひとつは「統語的対応型」で、そして「意味論的固定型」と「語用論的調整型」である。「統語的対応型」とは、「NP₂のNP₁」と訳すパターンを指す。では、「意味論的固定型」と「語用論的調整型」はどのようなものなのか。

「意味論的固定型」とは、たとえばSLのNP₁とNP₂の関係が、西山(2003)のいうように「意味的に完結している」パターンを反映させた訳出である。つまり、NP₁とNP₂の関係が、統語的にも意味関係でも固定されていて、聞き手としての通訳者には独自の解釈を加える余地はなく、その固定的な関係を訳出に直接反映させているものである。

(2) a. 55% of the Iraqis who are Shiite [#3]

b. 55%を占めるシーア派の人たち

(3) a. the establishment of democracy [#4]

b. 民主主義を醸成する

c. *民主主義が醸成する

(2)の場合、NP₁の“55%”とNP₂の“the Iraqis who are Shiite”の関係は、NP₁がNP₂の数量をあらわす関係となっており、日本語では「を占める」と字義通りにあらわされている。また、(3)ではNP₁の“the establishment”は行為をあらわす名詞であり、NP₂の“democracy”はその行為の対象となる名詞句として関係が成立している。そのため、(3c)は容認されないの、通訳者はこのように訳出しないことは容易に分かるだろう。このように、「意味論的固定型」とはSLの意味関係に基づいて訳出している訳出パターンを指す。

だが、同じように NP₁ が動作をあらわす名詞であっても、言語化された情報だけでは NP₁ と NP₂ の関係を決定することができない場合もある。(4) を見ていただきたい。

(4) a. the overthrow of Saddam Hussein

b. サダム・フセインを打倒する

c. サダム・フセインが打倒する

(4) では、NP₂ の “Saddam Hussein” は、動作をあらわす NP₁ の “the overthrow” の行為者とも被害者とも解釈できるため、(4 b) と (4 c) の双方とも解釈が成立する。この場合、どちらの解釈をとるかは、通訳者が、語用論的に読み込んで決定しなくてはならない。このような場合、通訳者が独自の解釈を加えていると考え、この訳出パターンを「語用論的調整型」とした。これは、通訳者が NP₁ と NP₂ の関係を言語情報の手がかりだけでは決定できずに、文脈や通訳者自身の背景知識などを参照にして、その関係に対して何かしらの解釈を加えたパターンである。

(5)

a. the candidate of conservative values [#5]

b. 保守的な価値観を代弁する候補

(5) の場合、SL と TL を比較すると、SL には「～を代弁する」に対応する表現は SL に見あたらない。つまり、これは通訳者が独自の解釈を加えて訳出した結果にはかならないのである。

上述した表 1 から、「NP₂ の NP₁」の訳出パターンの出現頻度が、その他の訳出パターンの出現頻度と比べて突出していないことがわかった。また、このパターン分類は訳出に向けて、次のような操作を行っている可能性を示唆している。ひとつは、同時通訳者が当該の原発言において右方枝分かれとなっている修飾部を、単純に左方枝分かれのかたちに変換するだけの、表面的な統語上の変形操作を最優先して、対応する訳語を付与しているのではないということである。もうひとつは、SL から TL で訳出にあたり、SL や TL とは

別の心的表象が関わっている可能性があることである。なぜなら、「意味論的固定型」の訳出にせよ「語用論的調整型」の訳出にせよ、同時通訳者が名詞句を動詞として訳出したり、SL にない表現を TL で訳出させることが可能となるためには、通訳者が当該の SL 表現だけを直接的な手がかりにしているのではなく、SL から得られる心的表象を介して訳語を付与していると考えの方が説明しやすくなるからである。その心的表象がどのような表象なのか、また、その表象にどのようなラベルを貼るかについては、意見の分かれるところであろう。しかし、それは本稿で問わないことにする。いずれにしても、心的な表象を構築している可能性が高いことは確かなようである。

ここでは訳出のパターンと、その出現頻度について検証した。だが、頻度の計測だけでは、呼び出し可能性の一側面しか明らかにならない。そこで、それぞれの訳出パターンを想起する速さを見てみよう。

4.3. 訳出パターンを想起する速さは？

もし「統語的対応型」の訳出が、単に 1 対 1 対応で自動化された訳出パターン、つまり心的表象を構築しないで統語的に対応させて訳語の付与のみで行われているならば、処理のプロセスと訳語候補を呼び出す労力の観点から、同時通訳における訳語候補としては「統語的対応型」パターンが最も呼び出し可能性の高いものとなり、必然的に訳語産出のタイムラグが最も短くなるはずである。そこで、通訳者が各パターンの訳出を想起する速さを比べてみた。

通訳者が SL を聞いたときから TL を訳出するまでの時間は、言語変換の単位、訳語を想起する速さに関して何らかの情報を提供してくれる。Ariel (1991) は、代名詞とその指示対象の呼び出し可能性を、テキスト上の距離という基準を設けて検証している。また、Goldman – Eisler (1972、1980) は、SL 聴取から TL 産出までのタイミング差 (Ear – Voice Span: EVS) の構造パターンを調べ、通訳者が言語変換をする単位は最低限主部と述部を備えたレベルであるとした。さらに船山 (他) (2002) は、SL に生じた語末と

TLで対応する語頭の時間差を測定することから、訳出遅延の特質を考察している。そこで、表1、表2であげたパターン別に訳出までの時間差を計測し、その相関関係を調べた。その結果が表2である。

訳出パターン タイムラグ	「統語的対応型」		「意味論的固定型」		「語用論的調整型」	
	NP ₁	NP ₂	NP ₁	NP ₂	NP ₁	NP ₂
平均(秒)	9.03	7.59	3.23	1.66	2.17	0.83
標準偏差	15.23	15.31	1.74	1.37	1.42	0.2

表2 訳出のタイムラグの結果

表2のタイムラグとは、原発言が“NP₁”と“NP₂”をそれぞれ言い終わったタイミングと、同時通訳者がTLで“NP₁”と“NP₂”をそれぞれ訳しはじめるタイミングの差をあらわしている。各訳出パターンのタイムラグの平均値は小数点第2位まで計測し、その平均値に対する標準偏差をそれぞれ求めた。

このタイムラグは、通訳者が当該のSL表現を聴取してから、対応するTL表現を訳出するまでの時間的な距離^vといえよう。興味深いことに、「意味論的固定型」パターンでも、「語用論的調整型」パターンでも、訳出のタイムラグにはさほど差がみられなかった。一方、「統語的対応型」パターンのタイムラグは顕著に遅れる結果になった。

また、標準偏差に関しても、「統語的対応型」パターンでは、NP₁が15.23、NP₂が15.31と際だった揺らぎを示した。偏差に揺らぎがあるということは、この場合には訳出までのタイミングがはやい場合と、きわめて遅い場合があることを示唆する。ここで注目したいのは、訳出まできわめて遅い場合である。船山(他)(2002)では、同時通訳における遅延訳出の要因のひとつとして、通訳者による概念の構築^{vi}をあげている。つまり、「統語的対応型」の訳出を遅延させることができるのは、通訳者が単に「NP₂のNP₁」と訳語を付与しているのではなく、SL入力をもとに何かしらの心的表象を構築したうえで、訳出を行っているのではないかと考えられる。

これらのパターンとタイミングの結果を踏まえるなら、図1のようにコスト

と聴衆への志向の2つの変数を軸にして、訳出のパターンを構造化できる。

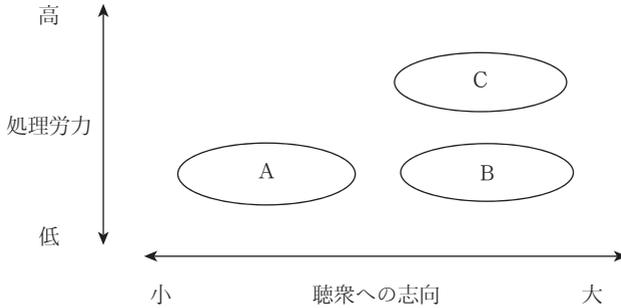


図1 訳出の2要因モデル

これはあくまでも相対的なものだが、南津・西村（2005）にあげた3つのパターンが複雑に生起する様子を、2つの要を軸にすることで簡潔にまとめられる。Aには「統語的対応型」があてはまり、Bには「意味論的固定型」があてはまる。そして、Cには「語用論的調整型」があてはまる。

ここから以下の2点が明らかになった。まず、訳出パターンは「統語的対応型」、「意味論的固定型」、そして「語用論的調整型」の3つに大別されることが分かった。次に、同時通訳者は“NP₁ of NP₂”を聴取しながら、どのパターンで訳出するにしても何かしらの心的表象を構築しつつ訳語を産出している可能性が非常に高いことである。

次に、「意味論的固定型」や「語用論的調整型」のように、“NP₁ of NP₂”に対してさまざまな訳出ができるのは、何に動機付けされているのかについて考察する。

4.4. “NP₁ of NP₂”をめぐると訳出パターンの多様性の要因

本節では「意味論的固定型」や「語用論的調整型」のように、“NP₁ of NP₂”に対してさまざまな訳出ができるのは、何に動機付けられているのかについて検証する。この多様性の要因には、同時通訳者が当該の表現の解読作業において文脈を参照にした読み込み作業が反映されているためである。

そこで名詞句“NP₁ of NP₂”と「NP₂のNP₁」の解釈について考えてみる。寺村（1980）は、英語の“NP₁ of NP₂”と日本語の「NP₂のNP₁」には、NP₁とNP₂を複雑で広範囲な意味関係でつなぐ機能があることを示唆している。また、西山（2003）では、日本語「NP₂のNP₁」の解釈の多様性を決定する要因として以下の4点をあげている (a) NP₁とNP₂の関係がそれぞれ補部 (complement) と主要部 (head) にあるかどうか。(b) 「NP₁の」が叙述性を持つか、(c)NP₁が項構造を要求するかどうか。(d)NP₁が飽和性の素性を持つかどうか。これらを踏まえて、実際の同時通訳データを観察してみる。

(6)

E 032	HAPPEN, THAT THE PREEMPTIVE STRATEGY IS NOW DE FACTO LAW JUST AS IN 1837.
J 032	いま、ま、起こったことですね、この先制攻撃はいまや、え、事実となった。
E 033	THE DECISION OF THE BRITISH TO ATTACK THE US'S CAROLINE BECAME THE SOURCE
J 033	1837年、 <u>イギリスが</u> 、 <u>え</u> 、 <u>アメリカ艦船、キャ</u>
E 034	FOR INTERNATIONAL LAW OF SELF-DEFENSE FOR THE NEXT 150 YEARS.
J 034	<u>ロラインに攻撃を仕掛けようと考えたのと同じだ</u> と思います。自衛ですね、そのために

[#2]

(6) では、E033 行目の “the decision of the British to attack the US's Caroline” が、J033 行目では「イギリスがアメリカの艦隊キャロラインに攻撃を仕掛けようと考えた」と訳出されている。原発言 (SL input) に対し、通訳者がどのように訳出したのか、そのプロセスを図示すると以下のようなろう。

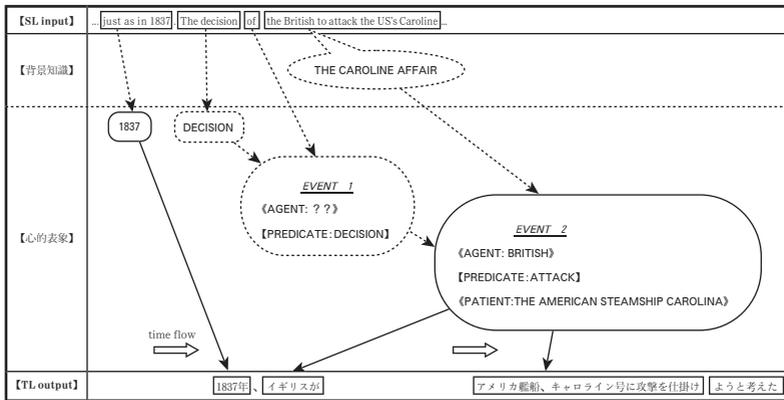


図2 訳出プロセス

まず、“just as in 1837”を聞いた通訳者は迷うことなく「1837年」と訳出している。これは、通訳者にとって数字は記憶への負担が大きいからである。もし、通訳者が記憶に保持させたのであれば、後続する原発言とのつながりを考慮に入れて助詞を挿入するはずである。

また、NP₁にあたる“the decision”をすぐに訳さなかったのは、「動作概念」ととらえて、心的表象レベルで整理しないと訳せないと判断したことを反映している。では、「動作概念」を構築できたのはなぜなのだろうか。それは、NP₁の“the decision”が項構造を要求する行為名詞だからである。その結果、原発言から項にはいるべき情報待つこととなる。そして、後続する“the British”がその項にあたると判断し、“NP₁”と“NP₂”の関係はさらに文脈を参照しなくても容認できると確信を持ち、「イギリスがアメリカの艦隊キャロラインに攻撃を仕掛けようと考えた」と訳出したと考えられる。

ここで注目すべきは、“US's Caroline”の箇所を、「アメリカ艦船、キャロライン」と「艦船」を挿入して訳出したことである。なぜ挿入できたのか。これには2つの可能性が考えられる。ひとつめは、通訳者がキャロライン号事件に関する具体的な知識をもっていたから、その一連の経緯に関する知識を想起したからである。その結果、「アメリカ艦船」と特定できたに違いな

い。ふたつめに、Caroline が何の名前かを聴衆が知らない可能性があるから、それを考慮したとも考えられよう。

では、通訳者が何らかの解釈を加えた「語用論的調整型」の場合はどう説明したらよいだろうか。(7)を見ていただきたい。

(7)

E 096	[B]: NOW, THERE ARE SOME PROBLEMS WITH THIS CLAIM... IF YOU SAY THE HEART AND SOUL OF
J 096	[I]: でもこの主張には、ちょっと問題があります。…
E 097	AMERICA IS FOUND IN HOLLYWOOD, I'M AFRAID YOU ARE NOT <u>THE CANDIDATE OF CONSERVATIVE</u>
J 097	アメリカの精神と 魂がハリウッドにあるというのであれば、これは
E 098	<u>VALUES (APPLAUSE)</u>
J 098	保守的な価値観を代弁する候補であるとはいえません。

[#5]

ここでは、E097～098行目“the candidate of conservative values”に対して、同時通訳者はJ098行目で「保守的な価値観を代弁する候補」と訳出している。ところが、「代弁する」に該当する原発言は見あたらない。では、この「代弁する」は、何に動機づけられて出てきたものなのだろうか。その動機を知るために、まずこの名詞の語彙素性の解読作業が必要となる。三宅(2000)によると、個々の名詞は語彙レベルで「±飽和性」という素性が仮定できるという。「[+飽和性]」の名詞はパラメータを含まず、単独で外延を決定できるものであり、「[-飽和性]」の名詞はパラメータを含み、その値が与えられない限り外延を決定することができない(三宅2000:87)。“NP₁ of NP₂”の解釈に当てはめて考えるなら、NP₁が「[-飽和性]」の素性をもつ名詞なら、NP₁のパラメータ値が決定されない限りは、“NP₁ of NP₂”の解釈を特定化することができない。では、図3の訳出プロセスを見てみよう。

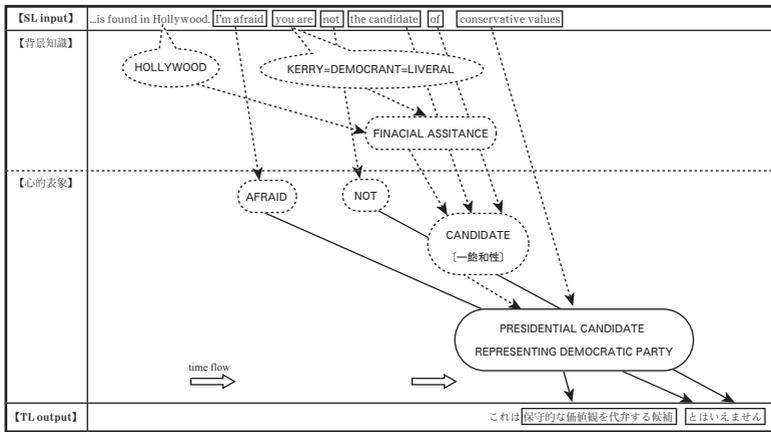


図3 訳出プロセス

(8) の E097 行目の “the candidate” は、何の “candidate” かのパラメータを満たすように要求する [-飽和] の素性を有していると考えられる。そのパラメータの値が “conservative values” で与えられているというのだ。しかし、所属政党などを直接表すのではない “conservative values” では “the candidate” の外延、言い換えれば、NP₁ と NP₂ の関係を充分に特定することができるとは言えない。そこで文脈を参照にした読み込み作業をしなくてはならない。

ここでとりあげた同時通訳 [#5] は、2004 年の米大統領選における、ブッシュ候補による共和党大統領候補の指名受諾演説である。“the candidate” が「2004 年の米国大統領選」であることは、同時通訳のテーマから自明である。通訳者は、ブッシュ候補が直前で対峙する民主党のケリー候補の発言を揶揄して、“My opponent recently announced that he is the conservative — the candidate of ‘conservative values,’ which must have come as a surprise to a lot of his supporters” と述べていることと、民主党はリベラルな支持者が多く、ハリウッドに民主党の支持者が資金援助を行っていることも念頭にあったに違いない。通訳者はつぎのような推論を行ったと考えるこ

とが可能である。

(8)

a. 民主党は保守的な性格ではない。

b. ケリーは民主党の大統領候補指名者である。

∴ c. ケリーは保守的な性格を代表する大統領選指名候補ではない

最終的に「代弁する」と訳出できたのは、通訳者がこのように広範に語用論的な推論を働かせたことを反映していると考えられる。

これまでの議論をまとめるならば、リアルタイムの同時通訳における名詞句“NP₁ of NP₂”の訳出は、この NP₁ 素性の解読作業と文脈や通訳者自身が持つ背景知識を参照した読み込みによって行われていることがわかった。

5. おわりに

多文化社会を迎えつつあるいま、異文化コミュニケーション能力を備えた人材が今後ますます必要となるであろう。その中で、日本の大学における通訳教育は、学生が語学力を高めつつ異文化の橋渡し役となる基礎能力を習得する格好の機会を提供するものといえよう。

ただし、その通訳教育の現場は、プロの会議通訳者を養成する民間の通訳者養成機関とは位置づけが大きく異なる。そのため、何をどのように教えるかという明確な指標がないばかりか、体系的なカリキュラムもないために、個々の担当教員が手探りで授業を組み立てている状態である。

そこで、本稿ではまず、日本の大学における通訳教育を、受講生が文化・状況に見合った適切な方法で行動でき、多文化を仲介する基礎能力を習得できるものを目指すべきであると位置づけた。その上で、通訳教育の根幹をなす、通訳における訳出プロセスの分析を提案した。本稿では、名詞句“NP₁ of NP₂”を分析の対象にして、どのような訳出パターンが見られるのか、多様

な訳出が生み出されるメカニズムについて考察した。その結果、「統語的対応型」・「意味論的固定型」・「語用論的調整型」の3つの訳出パターンに大別されることがわかった。また、訳出するにあたって、SLの語彙情報と文脈や通訳者が持つ背景知識をもとにした読み込み、そして、聞き手への配慮の相互調整が行われていることもわかった。

このように、通訳を行うにあたって、2つの言語間の表面構造の違いや、その背景にある文化的な要因をさぐり、聞き手にとってわかりやすく、誤解の無いように伝えるにはどのように工夫したらいいのかを分析することは、学生にとって言語経験をより深め、異文化を体験することにつながるといえよう。その意味で、通訳演習において、プロセスを明示化して分析する意義は大きい。

今回は名詞句に限定した分析に終わっているが、今後はさらに多角的にデータを参照した分析が必要となる。

参考文献

- Ariel, M. (1990) *Accessing Noun—Phrase Antecedents*. Routledge
- Chernov, G.V. (1999) “Simultaneous Interpreting in Russia” *Interpreting* 4(1), 41—54
- 船山仲他(他)(2000)「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」宮端一範(編)『同時通訳における情報フローの認知言語学的検証：平成10—11年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書：3—26
- Gerver, D. (1976) “Experimental Studies of Simultaneous Interpretation: A Review and Model” In Brislin, R. W (ed.) *Translation: Applications and Research*. New York: Gardner Press, 165—207
- Goffman, E. (1963) “K Istoriya sinkhronnava perevoda” *Chetoradi Perevodchika* 1, 20—26
- Goldman—Eisler, F. (1972) “Segmentation of Input in Simultaneous Translation” *Journal of Psycholinguistic Research* 1 (2), 127—140

- Herbert, J. (1978) "How Conference Interpreters Grew" In Gerver, D & H.W.Sinaiko, (eds.) *Language Interpretation and Communication*, Plenum Press, 5 – 10
- Hu, Q. (1993) "On the implausibility of equivalence III " *Meta* 38 (2), 227 – 237
- 稲生衣代・染谷泰正 (2005) 「通訳教育の新しいパラダイム – 異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論」『通訳研究』 5 : 73 – 110
- Johns, R. 1998. *Conference Interpreting Explained*. St Jerome Publishing
- Kopczncki, A. (1980) "Problems of Quality in Conference Interpreting" In Fisiak, J. (ed.) *Contrastive Linguistics: Prospects and Problem*, 283 – 300
- Mackintosh, J. 1999. "Interpreters are Made not Born" *Interpreting* 4(1), 67 – 80: John Benjamins
- 南津佳広・西村友美 (2005) 「同時通訳におけるリアルタイムの訳出分析 – 名詞句 NP₁ of NP₂ とその訳出をめぐる」『同時通訳データに基づく言語理解過程のミクロ分析：平成 15 – 16 年度科学研究費補助金（研究基盤（C）（2））研究成果報告書』：17 – 32
- 三宅知宏 1995. 「日本語の複合名詞句の構造」『現代日本語研究』 2 : 49 – 66
- _____ 2000. 「名詞の『飽和性』について」『鶴見国文』 35 : 79 – 89
- 鍋倉健悦 (1986) 「通訳訓練法と現場教育への応用」『獨協大学外国語教育研究』 5 : 137 – 144
- 西村友美 (1995) 「大学における通訳授業の問題と今後の方向性」『京都橘女子大学外国語研究センター紀要』 4 : 15 – 28
- 西山佑司 (1991) 「『NP₁ の NP₂』の曖昧性について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 23 号 : 61 – 82
- _____ (2003) 『日本語の名詞句の意味論と語用論 – 指示的名詞句と非指示的名詞句 –』 ひつじ書房
- 小沢初恵 (1998) 「新設・英語通訳コース報告 – アプローチと成果」『東海大学外国語教育センター所報』 18 : 69 – 78

- Recanati, F. (2004) *Literal Meaning*. Cambridge University Press
- Seleskovitch, D. (1968/1978) *Interpreting for International Conference*. Pen and Booth
- Seleskovitch, D. (1999) “The Teaching of Conference Interpretation in the Course of the Last 50 Years” *Interpreting* 4(1), 55–66
- Seleskovitch, D and M. Lederer. (1989/1995) *A Systematic Approach to Teaching Interpretation*. The Registry of Interpreters for the Deaf
- Setton, R. (1999) *Simultaneous Interpretation: A cognitive – pragmatic analysis*. John Benjamins
- 新崎隆子 (2005) 「英日逐次通訳プロセスを応用した英語学習」『通訳研究』5 : 183 – 202
- 寺村秀夫 (1980) 「名詞修飾部の比較」國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第2巻 : 文法』 : 221 – 266
- 鳥飼玖美子 (1997) 「日本における通訳教育の可能性 – 英語教育の動向を踏まえて」『通訳理論研究』13 : 39 – 52

同時通訳データ

No.	タイトル	年月日	放送局1	放送局2
# 1	「Bush 勝利宣言」	2000/ 12/ 13	NHK – BS	
# 2	「イラク最後通告」	2003/ 03/ 18	NHK – BS	CNN
# 3	「徹底検証 イラク戦争 (1)」	2003/ 04/ 24	NHK – BS	
# 4	「徹底検証 イラク戦争 (2)」	2003/ 04/ 25	NHK – BS	
# 5	「Bush 指名受諾演説」(同時通訳)	2004/ 09/ 22	CNN	
# 6	「Bush 指名受諾演説」(時差通訳)	2004/ 09/ 22	NHK 総合	

ⁱ 当時は国際基督教大学でも通訳訓練が行われていたが、ディレクターでもあった齋藤美津子はサイマルの設立にも関わり、大学で通訳訓練を行った訓練生をサイマルへ

と進ませていた向きもあるようである。また、ヨーロッパに見られるような通訳者の職業団体としては、1980年にロシア語通訳協会が設立されている。この組織は、通訳者の斡旋を行ったり、通訳料金を規定しているほか、通訳技術の研修も行っている。ただし、運用言語がロシア語に限られているために AIIC ほどの影響力はない。

ii リアルタイムでの発話理解と言語変換を迫るために、原稿なしで行っている同時通訳をデータとして採用した。

iii 手順としては、音声編集ソフト “Digi on sound” を用いて、SL に対して TL の出だしの位置あわせを行ったスクリプトを作成した。文字の制約上、厳密にタイミングをあわせることはできないものの、相対的な時間関係を知るには十分なスクリプトである。

iv ただし、TL にて全く訳されていないもの、NP₁ もしくは NP₂ のどちらかしか訳されていない場合も対象から外した。また、“the kind of NP”、“a sort of NP”、そして “a number of ” などのような、日本語に訳出する際には訳語がほぼ決まっているような idiomatic な表現は対象外とした。

v 対訳遅延の物理的な実時間（船山 2002）

vi 船山（2002）のいう「概念」とは、言語化を可能にする心的に構築された表示（表象）である。その意味では、本稿でいう「心的実体」と船山のいう「概念」のひとつとして考えてよいであろう。